

香港のペスト(2) 青山の感染

薬学雑誌 1894年度 p 695, 726

明治27年、北里柴三郎、青山胤通を中心とする一行は、ペストの研究のため6月5日横浜を出航、12日香港に着いた。翌13日は香港の伝染病担当医師J. ローソンの案内で市内各病院を視察、14日から研究開始、すぐに北里は青山の解剖で出てきた臓器からペスト菌を発見する。純培養標本をコッホ研に送付、ランセットに速報を出す。

一方、青山は日本調査団の研究が一段落した28日、晩餐会で発熱する。キニーネを飲んだが翌日も熱は下がらず、左脇にしこりを認め、腺ペストを確信した。死亡率は7割。北里グループの石神も発症、2人はローソンの斡旋により病院船ハイジア号に収容される。30日は更に悪化、北里中川は相談して内務大臣宛に2人の発病を電報で知らせた。さらに翌7月1日には「青山危篤」の電報が内務省に届く。その後数日間電報がこず、日本中が彼は死んでしまったと思ったのだが、これは電報の予算が十分でなかったからとか。その後電報がきたけれども予断は許さぬ状況だった。

薬誌では、この間の経過は一切記述がない。事態の進展が早く、一般新聞でも報じられていたため、月1回の薬誌では

書くことがなかったのであろう。派遣辞令(5月26日)を掲載した6月号から1か月経った7月号は既に発病、見舞いの記事になっている。

青山は36歳ながら、帝大内科教授、2年前には付属病院長にも就任、日本医学界の宝だったと言ってよい。薬学会は7月5日の例会後、役員評議会を開き、「在香港青山博士、石神大軍医の病氣慰問として医学士高田耕安氏派遣に付、本会より右費用の内へ金30円贈与すること」を決議した(p 726)。

医科大学助手高田の香港派遣には、学士会、東京医学会、日本薬学会、国家医学会、帝国大学の有志者が醵金して同費用に充てた。高田氏は7月13日、20:30発の汽車にて出発、薬学会からは丹波敬三が代表として横浜まで見送った。7月14日には青山博士の家族(青山孝子、親戚一同)から薬学会に礼状が来る。昔の手紙らしく挨拶ばかりで感情の全くない文章であるが、彼らは青山の死を覚悟していただろう。

小林 力